

一八八五年十一月六日(金)

シャームプクルの家における聖ラーマクリシュナ

カーリー・プー ज्याの日に信者たちと共に

聖ラーマクリシュナは、シャームプクルの家の二階の南側の部屋で立っていらつしやる。午前九時。タクルは新しい衣服を召して、額に白檀チヤンダの粉で赤い印をつけておられる。

校長はタクルの言いつけで、シッデーシュワリー寺(奥注)のカーリー女神マにお供えしたプラサード(供物)を持ってきていた。タクルは、そのプラサードをうやうやしく手にとつて立ったまま少しいただき、いくらか頭の上のせていらつしやる。プラサードをいただくときには、履き物をお脱ぎになった。そして校長に、「結構なプラサードだね」とおつしやつた。

今日は金曜日。アツシンアツアツシヤ新月。一八八五年十一月六日。カーリー・プー ज्याの日。

タクルは校長にお会いになつて、ターンタニヤのシッデーシュワリー・カーリー女神マに花とココナツと砂糖とサンデシュを供えて、朝方お詣りに行かせた。校長はガンガーで沐浴をしてから裸足でお詣りして、裸足のままタクルのところにプラサードをお持ちしたのである。

タクルはもう一つ、校長に言いつけてあった。ラームプラサードとカマラーカーンタの詩の本を買ってやることだ。サルカル医師にあげるらしい。

校長「この本、持ってまいりました。ラームプラサードとカマラーカーンタの詩の本でございます」
聖ラーマクリシュナ「この詩をみんな、（医師の心のなかに）たたき込んでやるんだよ」

詩——

わが心は君（神）を求めて

闇の部屋を手さぐりて狂いあがく
すべてを忘れるほどの愛なくして

どうして君をつかめよう

（訳註1）シッデーシユワリー寺——カルカッタ、ターンタニヤにあるシッデーシユワリー（カーリー女神）を祀った寺院でカーリーバリとも言う。一八〇三年にシャンカル・ゴーシユが建立した。彼の曾孫がスポドゥ・ゴーシユで、後のスワミ・スポターナンタ。この寺院には聖ラーマクリシュナやヴィヴェーカーナンタも何度か訪れている。ケーシャブ・センの病氣平癒を祈って、青ココナツツと砂糖をお供えたのは、この寺院のシッデーシユワリー・カーリー女神である（一八八二年二月二十六日、四月二日『不滅の言葉』参照）。マヘンドラ・ゲプタ（校長）の家はこの寺院から1kmほど北に位置している。

詩^{うた}——

カーリーの性相を知るは誰ぞ
六派の哲学はるかに及ばず

詩^{うた}——

心よ、耕^すす術^{すべ}を知れ
人間という名の未墾の土地を

詩^{うた}——

さあ心よ、歩いて行こう
カーリーという願^カ望^ル成^バ就^タの樹^ルの下で
四つの生命の実をつもうよ

四つの生命の実——正^ダ義^ル、富^ア、愛^ル、解^カ脱^シ

校長「それがよろしうございます」

タクルは校長といっしょに、部屋の中を歩いていらっしやる。こんどはスリッパを履いて——。
ひどい病気なのに、ニコニコしておられる。

聖ラーマクリシュナ「それから、あの歌もいいね！——この世はまぼろしの館^{やかた}。それから、こ

の世はゆかいな運動場！^{あそびごや} 兄弟よ、ゆかいな市場で笑い転げる！」

校長「そうでございますね」

タクールは突然、何かに驚いたようにビクリとなさった。急いでスリッパを脱ぎ、ジーツと静かに立っていらつしやる。そして完全な三昧状態にお入りになった！ 今日^{ジャガド・モウター}は宇宙の大実母のお祭り——それでこんなに頻繁に三昧に入られるのだ！ かなりたつてから、深く息を吐いて、興奮を抑えるのに苦勞していらつしやるようだ。

カーリー・ブージャの日に信者たちと共に

タクールは例の二階の部屋で、信者たちにとりまかれて坐つていらつしやる。午前十時、ベッドの上で枕によりかかつて坐つておられるタクールのまわりに、信者たちがいる。ラーム、ラカール、ニランジャン、カリパダ、校長はじめ、大ぜいの信者たちだ。タクールの甥のフリダイ・ムクジェーの話が出ている——

聖ラーマクリシユナ「ラームたちに——フリダイは今でもまだ、土地、土地といつてさわいでいるんだよ。カーリー寺院にいた時分には、『肩掛けを下さい、さもないと訴えますよ』なんて言ったこともある。

マーが彼を追い出してくれたんだよ。人が来ればカネの話ばかりしていてね。彼がもし、ずっとわたしのそばにいたら、今来てるような人たちは誰も寄りつかなかったにちがいない。マーが追っ払っ

てくれたんだ。

「(訳註2)Rも同じようになってきた——不平ばかり言つて。馬車でわたしの供をするのを渋つたり——。ほかの若い人たちがわたしのところに来るとうるさそうにして——。彼等に会おうと思つてカルカッタに行くと、いつもわたしにこう言うんだ。『あの連中は出家するだろうと思つて会いに行くんでしよう!』何か飲み物や食べ物を若い人たちに出したいと思えば気をつかつて、『お前、先に食べて、それから連中に出しておやり——』と言わなきゃならない。そばにいるのも、そう長くはないなど感じていた。

マーに言つたよ。——『マー、Rをフリダイみたいに遠くにやらないでくれ。そうしたらそのあとで、プリンダーヴァンに行くという話になった。』

「Rがもしここにずっといたら、こんな若者たちがここに集まりやしなかつたよ。Rがプリンダーヴァンに行つてしまつてから、若い人たちが大ぜい来るようになったんだ」

「Rといわれた人(うやうやしい態度で)——そんなつもりではなかつたのですが……」

ラーム(ダッタ)「君自身よりタクルの方が、ずっとよく君の心を知つておられるとは思いませんか?」

「R……」(無言)

聖ラーマクリシュナ「(Rに向かつて)——お前、どうしてあんなふうだったんだ。わたしはお前のことを息子だと思つて愛しているんだよ! もう何も言うな。……(訳註3)今はもう、あんな態度が

なくなつたからね。

会話のあとで信者たちが別室に行つたあと、タクルルはRを呼びよせてこうおっしゃつた。「わたしは言ったこと、気にしているのかい？」

R「いいえ。平気です」

タクルルは校長におっしゃつた。——「今日はカーリー・ブー ज्याだから、ここでも何かお祭りの用意をしたほうがいい。みんなに相談しておくれ。(護摩用の)黄麻ジュエイトの枝をもつてくるとか——」

校長は応接間に行つて、みんなにこのことを話した。カリパダはじめ数人の信者たちがお祭りの準備にとりかかった。

二時ころ、医師がタクルルの診察に来た。今日はニールアマニ教授が医師についてきた。タクルルのそばには大ぜいの信者たちが坐つている。ギリシュ、カリパダ、ニランジャン、ラカール、コカ(訳註4)(マ

(訳註2) Rはベンガル語原典ではゴパールを略したゴと記載されている。聖クリシュナとゴパール(牛飼いの少年)の関係に見立ててラカールを、ゴパールを示すゴと表現したと思われるが、伝わりにくいのでスワミ・ニキラナンダの翻訳と同様にRと記載する。

(訳註3) ベンガル語原典のコタムリトには、……や*などの記述が数ヶ所見られるが、これは著者が読者に伝えることをためらつた内容だと言われている。これもそういった内容が隠されていると思われる。

(訳註4) コカ——小さな男の子を表す。坊やのような愛称で、小柄な少年や可愛らしい少年、末っ子などを呼ぶ時にも使われる。スポドゥ(後のスワミ・スポダーナンダ)もこう呼ばれていた。

ニンドラ)、ラトゥ、校長、その他。タクールは始終ニコニコしながら、医師と病状のことや薬のことをお話しになったあと、「あんたのために、この本を用意しておいたよ」とおっしゃって、校長が持参した二冊の詩の本を医師にお渡しになった。

医師が何か歌って聞かせてほしいと言ったので、校長ともう一人の信者がタクールにたのまれてラームプラサードの歌をうたった。

詩^{うた}
—

わが心、君を求めて

暗き部屋を手さぐりて狂いあがく

すべてを忘れるほどの愛なくして

どうして君をつかめよう

詩^{うた}
—

カーリーの性相を知るは誰ぞ

六派の哲学はるかに及ばず

詩^{うた}
—

心よ、耕す術すべを知れ

人間という名の未墾の土地を

詩うた——

さあ心よ、歩いて行こう

カーリーという願望成就カールパタルの樹の下で

四つの生命の実をつもうよ

医師はギリシユに言った——「あなたの、あの歌はいいですね。ヴィーナの歌——ブツダの生涯の」
タクールの合図でギリシユとカリパダの二人が合唱をする——

歌——

私のかわいいこのヴィーナ

心をこめてやさしく弾けば

絃いとは私の心をくんで

こよなく甘い声を出す

高すぎもせず、低すぎもせず

1885年11月6日(金)

音律しらべの流れは美しく

百すじの川とあふれ出す

私の愛しいヴェーナの絃いとは

ゆるめすぎでは音が出ず

きつく締めればプツンと切れる

歌——

われら、何処どこより何処どこへ行くか？

安息やすみはいつ、何処どこにあるのか知らず

また戻りきて、泣き笑う輪廻の輪

いつまで廻る、この空むなしき営み！

覚めよ！ 汝ら肉の眼は開けども

浅き夢に眠り痴しれたり！

覚めよ！ 無明の夢を砕けよ！

いつの日、この夢を砕くのか？

重く深く危きこの暗黒^{やみ}を
滅し尽くして光明^{ひかり}を放つ
覺者^{ブッダ}よ、君をおきて他に道なし
君が御足もとに、われ救いを求む

歌――

ニタイよ、しっかりとつかんでおくれ
わたしは今にも死にそうだ
わたしは皆にハリの名を与え
ごらん、愛の河に波が立ち
ニタイよ、心の奥の悲しみを
どこぞに捨てるひまもなく
衆生^{みんな}の悲苦^{なやみ}を救おうと
愛の奔流に流されゆく

歌――

命をこめてハリの名となえ

ニタイ――ニテイヤーナンダ
チャイタニヤ
の兄

マダイもジャガイも来て踊れ
なぐつたなど忘れてしまえ
ハリの名となえて踊ろよ兄弟

マダイ、ジャガイ——共にチャイタニヤに救
われたならず者

歌——

ラーダーの愛をとっていけ
愛の大潮が流れてゆくよ
さあ欲しいだけ持つてゆけ
ラーダーの望みはすべての人に
愛を分けたい配りたい
ラーダーの愛でハリの名うたえ
愛に命はかきまわされて
愛の波動で命は踊る
ラーダーの愛でハリの名うたえ
さあ、さあ、さあ、さあ、さあ歌え！

歌を聞いているうちに、二、三人の信者は恍惚こうこつとなつてしまった。——コカ(マニンドラ)も、ラトゥ

も！ ラトウはニランジャンのわきに坐っていた。歌が終わると、医師はまたタクールと話しはじめた。昨日、プラタブ・マジュンダール医師がタクールに、ナクス・ボミカクという薬（劇薬ストリキニーネを処方してくれていた）。サルカル医師はそのことを聞いて腹を立てている。

医師「私がまだ死んでもいないのに（私を差し置いて）、ナクス・ボミカクとは……」

聖ラーマクリシュナ「ハツハツハツハ、あんたの無明アヴィディヤが死にやあいい！」

医師「私はアヴィディヤクなんか持つていたことはありませんよ」

医師は無明クのことを、情婦クと解釈しているらしかった。

聖ラーマクリシュナ「アハハハ。ちがうよ！ 出家の場合は、無明の母が死んで識別ヴィヴェカという子が産まれるんだ。無明アヴィディヤの母が死ぬと穢けがれから喪もに服ふくすだろう。だから、出家に触れてはいけない、と言われているんだ」（訳註——出家サニヤシには御足の塵をいただく以外、触ることは出来ないが、その理由を、母（親族）が死んで喪もに服くしている人に触ることが出来ないベンガルの風習に例えて説明している）

ハリバツラブが部屋に入ってきた。タクールは、「あなたを見ると、嬉しくなるよ」とおっしゃった。ハリバツラブは非常に物腰ものこしの低い人だ。マツトをよけて、ただの床の上に坐ってタクールを扇いでいる。彼はカタックの政府付き弁護士である。（訳註、カタック——カルカッタの南西、約370kmのオリッサ州の都市）

そばにニラーマニ教授が坐っている。タクールは教授に敬意を表して、こうおっしゃった。——「ホントに、今日はわたしにとって大そうな日だ」しばらくたって、医師と友人のニラーマニ教授はいつもを告げた。ハリバツラブも帰った。帰りしなに、「私はまた参ります」と言った。

宇宙の母——カーリーの祭りプージャ

秋の新月アマヴァシヤの日、夜の七時。二階の部屋にカーリー・プージャの用意が出来上がった。さまざま種類の花。白檀チャンダンの粉、ビルヴァの葉、赤いハイビスカス、パヤス(乳粥)やほかにいろいろの甘いもの……。信者たちはタクルの前に運んだ。タクルは坐っていらつしやる。信者たちはタクルのまわりに輪になって坐った。シャラト、シャシー、ラーム、ギリシユ、チュニラル、校長、ラカール、ニランジャン、若いナレン、ビハリーたち大ぜいいる。

タクルが、「お香を——」とおつしやつた。間もなくタクルは、宇宙ジャガット・マータの大実母に用意してあるもの全部をお供えした。校長がそばに坐っている。彼の方を見てタクルは、「みんなで少し瞑想しよう」とおつしやつた。一同はひととき瞑想を行った。

次に、ギリシユが美しい花輪をタクルの足もとに捧げた。校長も香りの強い花を捧げた。そのあとでラカールが、続いてラームはじめ信者一同が、次々と花を捧げた。

ニランジャンはタクルの足もとに花を捧げて、ブラフママイー、ブラフママイー(ブラフマン妃)と言いながら床にひれ伏し、お足に額をつけて拝した。

信者たちは声をそろえて、ジヤイ・マー! ジヤイ・マー! (御母に栄えあれ)と唱えた。

そうこうしているうちに、タクル、聖ラーマクリシユナは三昧境になられた。なんとという光景だろう! 信者たちはタクルの驚くべき変容を見ていた。光かがやく相貌! 両手をかざして、恐れ

を除き祝福を与える仕草（施無畏の印相）をしておられる。微動だになさらず、外界の意識は全くなくされて！ 北向きに坐っていらつしやる。宇宙の大実母ご自身が、タクールの中に顕れていらつしやるのだ！

一同は声を吞んで、この靈妙な除災招福、施無畏の大実母の、活きたお姿を凝視している。こんどは信者一同で讃詞を奉呈する。一人が先導して、次に皆が声を合わせてうたうのだ。

ギリシユが先ず歌う――

おお、雷雲に走る稲妻のように眩い姿は誰か

おお、真紅の蓮のような足を絶対神の胸にのせた女は

その足爪は夜、満月とかがやき

昼は日輪と燃えて世界を照らす

時には艶やかにやさしく衆生に笑みかけ

時には恐ろしき哮笑いを虚空にひびかせて

地上の最も強き者をも脅かす

再び――

大実母よ、弱き者たちの救い主
罪を滅ぼし給う御方よ

そのなかにサットヴァ、ラジャス、タマスの三つの性を宿し
すべてを創り、育て、壊し給う御方

無限相にして無相なるすべてのすべてなる完き御方

あなたこそカーリー、またターラーであり

あなたこそ至尊の自然女性原理

あなたこそ魚、亀、野猪、その他すべての化身

あなたこそ、地、水、火、風、空、すべてを妊む大いなる母――

サーンキヤ、パタンジャリ、ミーマンサー、ニヤーヤの哲学は
ひたすらにあなたを探し求めて学び、瞑想する

ヴァイシエーシカ、ヴェーダーンタ派もつまずき、手さぐりして
あなたを探しつづけたが、しかもついに見つけられない

無限定、終わりなく、始めもなきあなたは
信者を愛しんで様々な形相を現し

過去、現在、未来の世界に常在してすべての恐怖を除く

形ある神を求めるものには人格神として

形なき神を好ものには無相の大原理じつぎとして――

光輝くブラフマンのみ認めるものたちもいるが

それすら大実母よ、あなた以外の何ものでもない

各人は自らの器量に応じた理想像をつくり

それぞれにそれを無上パラ・ブラフマンの真理と仰ぐ

それらの彼方にある超越者トッリヤ、それは口で説明できぬもの

三界に常在遍照せる大原因

すべてのすべてなるあなた、わたしの大実母クラーマよ

こんどはビハリーが先導する――

マーよ、死骸の上に坐っておいででのシャーママよ

私の切なる願いをお聞きとどけ下さい

臨終いまわの際、下半身が水に浸されるとき

どうぞ私の胸にお姿を見せて下さい

そうすれば私は心の中で森や林に行き

三界――天界(天国)、地上界(地球)、地底界
(地獄)

ヒンドゥー教では人が死ぬと下半身を聖なる
川に浸す習慣がある

1885年11月6日(金)

真紅のハイビスカスの花をたくさん集めて
信仰の白檀香をたっぷりと添えて
あなたの蓮華の御足もとに置きましよう

次にモニ(校長)が何人かの信者たちと共に――

歌――

すべてはあなたの御意みごころのまま

あなたはしたいようにする

あなたの仕事をあなたがするに

人は私わががするという

象を泥沼につないで置いて

ちんばを峯にのぼらせる

完全さとり智を与える人もあり

俗世に溺らす人もある

わたしは道具であなたが使い手
わたしは家であなたが住み手
わたしが馬車ならあなたは馱者ぎよしやよ
あなたの行かせる方に行く

歌――

この世のことは大実母おかあさま
あなたの恵みですべて成り
山とそびえる障害も
とけてきれいに流される

あなたは吉祥至福ややかたの館
すべてをめでたくしてくれる
何故それなのに行く先を
むなしく思い悩むのか

歌――

よろこびに満ちあふれる大実母よ
つたなき我等の幸福を奪うなかれ

.....

歌――

深い暗闇のなかにこそ、大実母よ
あなたの形なき美はきらめく

.....

タクールは、三昧が解けて平常になられた。そして、次の歌をうたうようにとおっしゃった。

歌――

いつ、どんなに愉快的な遊びをするか、誰が分かるだろう
マー、シャーマ 至福の波であるお方！

.....

これが終わると、タクールはまた次の歌をお命じになった。

歌——

よろこびに、我を忘れて

シヴァと遊び戯れる大実母は

美酒飲みて、ゆらりゆらりと

よろめけど、倒れたまわず

.....

タクールは信者たちを喜ばせるために、パヤス(乳粥)を少々お口にもつていかれた。しかし、またまた霊的興奮に圧倒されて、外の意識をなくしてしまわれた!

間もなく信者たちは、タクールを拝してからお供え物ブラスターを下げて応接間に行った。そして、みんなそろって和気あいあいとして、楽しくにぎやかにブラサードをいただいた。夜九時、タクールが、「夜になってからスレンドラの家で今日カーリー・ブージャがあるから、みんな、お招きまねにあずかるように——」と言つてよこされた。

信者たちは嬉々としてシムラ街のスレンドラ家に行った。スレンドラは心から歓迎の意を表して、一同を二階の応接間に案内した。家中、お祭りの気分にうち満ちている。歌うものあり、楽器をならすものもあり、皆、お祭りの楽しさを十二分に味わっている。

スレンドラの家でブラサードのごちそうをいただいて信者たちが各々の家に帰ったころは、もう夜中の二時頃であった。